

前 國 語

人間文化学部

地域文化学科

生活デザイン学科

人間関係学科

国際コミュニケーション学科

(60分) (90分)

注意事項

- 1、解答開始の合図があるまで、この問題冊子および解答冊子の中を見てはいけません。
- 2、問題は3題で、12ページありますが、志望する学科によって解答する問題が異なるので注意しなさい。指定されていらない問題を解答しても採点しません。
- 3、生活デザイン学科・人間関係学科・国際コミュニケーション学科を受験する者は、第1問・第2問を解答しなさい。地域文化学科を受験する者は、第1問～第3問を解答しなさい。

この注意事項は、問題冊子の裏表紙にも続きます。問題冊子を裏返して必ず読みなさい。

4、解答開始後、解答冊子の表紙所定欄に受験番号、氏名をはつきり記入しなさい。表紙にはこれ以外のこと書いてはいけません。

5、解答は、すべて解答冊子の指定された箇所に記入しなさい。解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがあります。

6、解答冊子は、どのページも切り離してはいけません。

7、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。解答冊子を持ち帰つてはいけません。

第1問

次の文章を読んで、後の問い合わせ(問1～4)に答えよ。



外岡秀俊「三度目の情報革命と本」（池澤夏樹編『本は、これから』岩波新書、二〇一〇年）より一部改変

注 ヨハネス・グーテンベルク……一四〇〇頃～一四六八年。活版印刷術の発明者。

ヤーコブ・ブルクハルト……一八一八～一八九七年。スイスの歴史家。

ヴァルター・ベンヤミン……一八九二～一九四〇年。ドイツの文芸批評家・思想家。

問1 傍線部ア～オのカタカナを漢字に直せ。

問2 傍線部①に「得失」とあるが、アナログ革命で得られたものと失われたもの、デジタル革命で得られるものと失われるものとは何か、本文中の言葉を用いて、句読点を含めてそれぞれ九〇字以内で具体的に説明せよ。

問3 傍線部②の「いま—ここ」という「回性」はどのようなものに見られるか、具体例を本文中から二つ抜き出してそれぞれ一〇字以内で答えよ。

問4 筆者の主張に合致するものを次からすべて選び、番号で答えよ。

- 1 複製技術や高度な通信技術によって実現される「デジタル革命」こそがまさに人間を進歩させる情報革命である。
- 2 「人間は進歩する」ものであると想定してしまうと、情報革命で獲得したものだけに注意が向きがちである。
- 3 確かに複製技術はわれわれに多くのものをもたらしたが、オリジナル作品ほどの芸術性は見られない。
- 4 デジタル革命が起きている今、「知の基盤」が支えてきた出版物の質の保証が困難になる可能性がある。
- 5 出版社や著者たちが真剣に議論をすれば、従来「紙の本」が果たしてきた文化装置は、ネット上にも構築できる。
- 6 インターネットや電子書籍など便利なものには必ずといってよいほど、予期せぬ落とし穴が存在する。

## 第2問

次の文章を読んで、後の問い合わせ(問1～3)に答えよ。





薄田泣董すすきだ きゆうきん「火の鳥を聴く」(『独楽園』)ウェッジ文庫、二〇一一年)より一部改変

注 何の樹のものとしもない……何の樹のものかも定かでない。

鮑照あいのぞ……四一五～四六六年。中国南北朝時代、宋の詩人。杜鵑の鳴き声は古くから蜀しょくの王の魂が鳴いでいる声だとされるが、鮑照は、そのことを『擬行路難ぎこうろなん』の中で詩にしている。

荊棘きよせき……いばら。

ほととぎす大竹藪おおたけやぶを洩る月夜……芭蕉の『嵯峨日記』にある句。

三十石……江戸時代の淀川を旅人を乗せて往来した三十石船のこと。安藤広重の浮世絵『京都名所之内淀川』には、三十石船と喰わんか船が描かれており、筆者はこの絵を意識して書いていると思われる。

喰はんか船……淀川を行き来する船に、酒や食べものを売りに漕ぎ寄せる小舟。

鼻高面はなたかおもて……天狗の面。香川県の金比羅宮は天狗とのゆかりが深い。

苦さけ……菅くさや茅かやなどで編んでつくつた船の覆い。

酣醉かんざい……十分に酒を飲み酔うこと。

問1 傍線部①の芭蕉の句「ほととぎす大竹藪を洩る月夜」から筆者はどのような情景を思い描いたか。本文の内容を参考に六十字以内で答えよ。

問2 鮑照、芭蕉、広重のほととぎすに対する反応にはどのような違いがあるか。それぞれの特徴がわかるように本文の内容をふまえて、句読点を含めて一五〇字以内で説明せよ。

問3 傍線部ア「痛高い激越な声」を出すほととぎすは筆者にとってどのような存在か。本文の記述を参考に、二五〇字以内でまとめよ。

**第3問** 次の文章は、ある男が都からの道中で、大勢の女性が乗った牛車に出会うところから始まる。この文章を読んで、後の問い合わせ(問1～7)に答えよ。

また、この男、アへとてまうづるに、ア逢坂の走井に、女どもあまた乗れる車を、牛おろして立てたりければ、この男、馬からおりて、とばかり立てりけるに、車、人来ぬと見て、牛かけさせていきけり。この男、車の供なる人に、「いづちおはします人ぞ」と問ひければ、「志賀へ」と答へければ、女車よりすこしたち遅れていきければ、かの逢坂の関越えて、待つ。来るけるあひだに、車よりかかることぞいひたる。

逢坂の名に頼まれぬ関川のながれて音に聞くひとを見て

かかりければ、あやしと見て、さすがに来て、男、返し、

名に頼むわれも通はむ逢坂を越ゆれば君にあふみなりけり

といひて、この女、「いづちぞ」といひければ、男、「アへなむまうづる」といひければ、やがて、「さは、もろともに。ここにもさなむ」とて、いきける。「さりとて、うれしきこと」とて、もろともにまうでて、寺にまうで着きてても、男の局、女の局近くなむしたりける。かくて、物語などあまた、をかしきやうにかたみにいひければ、をかしと思ふ。この男、まうでたる所より、寺ぞふたがりける。明くるまで、えあるまじかりければ、たがふべきところにゆきけり。「命惜しきことも、ただ行先のためなり」といひて、いきければ、女どもも、なほあるよりはものさうざうしくて、「さらば、いかがはせむ。京にてだにとぶらへ」とて、内裏わたりに宮仕へしける人々なれば、曹司も、使ひける人々の名なども問ひけり。この男、うちつけながらも、立つこと惜しかりければ、かうぞ。

オ

女、返し、

かくのみしゆくへまどはばわが魂たまをたぐへやせまし道のしるべに

また、返せむとするほどに、男女の供なる者ども、「夜明けぬべし」といひければ、立ちとどまらず、この男、浜辺の方に、人の家に入りにけり。

さて、あしたに、車にあはむとて、網引かせなどしけるに、知れる人、逍遙せむとて、呼びければ、そちぞこの男はいにける。(後略)

(『平中物語』より、一部改変)

注 この男……『平中物語』の主人公で、平 貞文(?)～九二三年のこと。

走井……逢坂関の西にあつた泉。

志賀……近江国志賀(今の大津市滋賀里)にあつた崇福寺のこと。

ふたがり……方塞りとなり、方違えが必要になつたということ。

曹司……内裏で女房に与えられる部屋。

うちつけながらも……とつてつけた思いつきのようであつたが。

浜辺……琵琶湖の湖畔。

問1 空欄 ア に入る言葉を本文の中から抜き出せ。

問2 傍線部イ「牛かけさせていきけり」という行動を女の一行が取ったのはなぜか、一〇字以内で説明せよ。

問3 傍線部ウ「あやしと見」たのはだれで、なぜそう見たのか。三〇字内で説明せよ。

問4 傍線部工「名に頼むわれも通はむ逢坂を越ゆれば君にあふみなりけり」を、掛詞がわかるように現代語に訳せ。

問5 空欄 オ には、傍線部力「かくのみしゆくへまどはばわが魂たまをたぐへやせまし道のしるべに」という女の返歌を引き出された男の歌が入る。男の心情を考え、ふさわしい歌を次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 知りぬらん往き来にならず塩津山世に経る道はからき物ぞと
- 2 限りとてわかる道のかなしきにいかまほしきは命なりけり
- 3 わがやどは雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなければ
- 4 あけぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそぼちつつ
- 5 立ちてゆくゆくへも知らずかくのみぞ道の空にてまどふべらなる

問6 傍線部キ「あした」を文意を踏まえて漢字に直せ。

問7 『平中物語』は歌物語の代表作である。次の中から歌物語を一つ選び、番号で答えよ。

- 1 竹取物語
- 2 雨月物語
- 3 源氏物語
- 4 伊勢物語
- 5 宇治拾遺物語